
異世界の冒険

アアアアア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界の冒険

【Nコード】

N0249H

【作者名】

アアアアア

【あらすじ】

ある少年の不幸な死に、神が同情して転生することとなった。そこから始まる異世界の冒険と戦い。

序章

「あ」「あ」「うわぁー」

地球に住むある一人の青年が交通事故でなくなった？

「んっ」

「あれっ」

「真っ暗で前がみえんって」

「ってかここ熱。あつ、あけるー、こ、ここからだせー」

という声は、誰にもきずかれず亡くなった。

序章（後書き）

初めての投稿ですがこれからよろしくお願いします。

序章 2

・・・

「えっ」

「俺、生きてるじゃん」

「つてか真っ暗で何にも見えないしこれが死後の世界かぁー」

・・・三時間後・・・

「暇、やることない、あーもう死ぬー」

・・・三日後・・・

「ほんと何にもねーつてか腹へったー」

・・・そのころ・・・

「私は、神なのになにもやることないなんて」

「あつあんなところに魂が、しかしあいつあんなところにいるなんて未練タラタラじゃないか」

「早死にだし転生させようか」

・・・ある少年・・・

「うわっ、光が」

「あーーーー」

・・・ある女性・・・

「ユナ、だ、だ、たいじょうぶか？」

「マイケル、心配してくれなくても大丈夫よ、もうすぐ無事に生まれるわ」

「そうか・・・」

・・・おぎあーおぎあーおぎああああああああああああ

ーーーーー

元気な男の子ですよ。

・・・ある少年・・・

おっ、光が見えた、二回も死ぬのか、ホントについてないなあー。

はあーなにかいいことないかなあー

上を見上げたら二枚目な男性が立っていた。さらに横には美人でとても若いお姉さんがいた。

「おぎあーおぎあー」（此处何処だー）

（言葉がしゃべれてねえーじゃねーか）「おぎあーおぎあーおぎ

あああああああああーーーーー」（生き返ったのはい

いが何で赤ん坊何だあああああーーーーー）

（はあーすつきりしたしかしこれからどうすればいいのかなあー）

序章 2（後書き）

書き方がよくわからず変になってしまいました。

序章 3

冷静になってから何回かしゃべれるか調べたけど、結局ろれつがうまく回らず言葉がしゃべれなかった。

さらにはなしている言葉が日本語、英語とはまるつきり違って、父、母になった人がはなしている言葉がさっぱりわからなかった。

・・・一年後・・・

普通からいえばはやくもあるけるようになった。
名前はカイト＝アークスであった。

「はあーやつと歩けようになった・・・ほんとにひまだったなあー」と、やっと屈辱的で暇な期間が終わり父が昔やっていたらしく毎晩語ってくれた冒険者を目指そうと思っていのだった。

7

そういう成り行きにより新聞や本を読み始めた。

（すげー、モンスターだ、あつ、魔法もあるじゃあねーか、やつほー）

・・・マイケル＝アークス（父）・・・

「ユナ、カイトが本よんでるぞ」（私の息子なのに優秀だなあー）

「まだ、一歳なんですからまだ言葉もうまく話せないですし読めても理解できませんよ」

・・・カイト・・・

（何だ、これ、さっぱりよめねーつくそ言葉も通じないし、こうなったら意地でも読んでやる）

三日後

（おおっ、も、も、文字が読めるようになったああー」

二年後

あ

・・・ユナ＝アークス（母）・・・

「マイケル、何時になったら言葉を話せるようになるのかしら」

「まあ、なんとかなるだろ」

・・・カイト・・・

まだ幼児なので見たものをどんどん知識として吸収していったため三歳でありながら博識になった。しかし、言葉は、日本語と英語に執着していて理解不可。

「くっ、まだこの世界の共通語上手く発音できねー」

序章 3（後書き）

なかなか文の構成が・・・

幼年期（１）

今日は、初めて外へ出る日である。なぜ今まで一度も外へ出た事がないかというと、父と母が言葉が話せないから周りと上手くとけ込めないという事を配慮してくれてのことだった。

しかし、そろそろ家族以外の人と接した方がいいからである。

、（おつ、久しぶりの外だーてゆーか周りは、畑か小さな家かあー、今まで住んでいたのは、ど田舎なんだなあー」

・・・マイケル・・・

「カイトもやつぱり外出たかったんだよなあー」

「そりあーまだ小さな子供ですからねえー」

「そうだよなあー、しかしいつも本ばかり読んでいる所からは想像もつかないじゃないか？」

「家の中にいてやることがないからじゃないからじゃないですか？」

「そうゆうもんか？」

「そうゆうもんよ」

・・・カイト・・・

「この方がこの村の村長さんだ」

ぺこり

「そうかまだ言葉が話せないようじゃな
ぺこり

「そうだ、わしの知人の孫娘を紹介しなくてはいけなかったな」

「おいミーナ、ミーナはおらんか」

「はい何いーおじいちゃんー」

「こやつがお前さんより一つ年上じゃあ、名は、ミーナ＝アズウエルじゃまあ仲良く」

ぺこり（言葉で意志疎通できなくても仲良くなれるかなあー）

「私は、ミーナ＝アズウエルよ、よろしく」

ぺこり

「もしかして言葉話せないの！」

ぺこり、ぺこり（性格良さそうでよかったー）

・・・ミーナ・・・

今日初めての近い年頃の少年を紹介された。しかし、言葉がしゃべれない年下の男の子だった。けどこちらの言ったことはわかるし、文字は書けるので、意志疎通がなんとかできた。

しかも、知識が豊富でとてもおもしろいことを教えてもらった。

（ 文字が書いて、知識をたくさん持っているのに何で話せないんだろう？）

「聞、い、て、る」

「ごめん、ちょっと考え事してた、もう一回はじめからお願い」

幼年期（１）（後書き）

今日も投稿できてよかったです。

幼年期（2）

・・・カイト・・・

あれから一年後・・・

四歳になった。そして、父親から、男なら困っている人を助けられるように体を鍛えろ、ということで父に鍛えられることになった。

（体を鍛えてくれる、よっしゃー）

「まず、筋トレから始める、一日、腕立て100回、腹筋100回、背筋100回にランニング10キロ」

「お父さん、そんなにたくさんできるわけない」（ま、まじかよ、死ぬうー）

「大丈夫だ、そんな大した練習じゃない」

「無理だー」

「さっさとやれ（拳骨）」

「はい、はい」

四時間後・・・

「やっと終わったー（ばた）」（あー、死ぬー）

「おい、カイトまだ終わってないぞ」

「ええええつつー、そ、そ、そんなー」

「まだ、やっと筋トレが終わっただけじゃないか、次は、組手だ」

（はーマジかぁー）

さらに三時間後・・・

「もつと、私をよく見ろ、そんなことじゃあーすぐ死ぬぞ」

「・・・はーいいい・・・」（も、・・・う、・・・だ、めえええー）

（・・・！！！！）

「おい、カイト、大丈夫か」

という声が、聞こえたが反応すらできず意識を手放した。

・・・マイケル・・・

最初はやる気があったのに筋トレ量を言っただけでやる気をなくすなんて情けないと思った。

しかし、やり始めると一生懸命やっていて我が息子ながらすばらしいと思った。

そして、本当は当分は筋トレを少しやるだけいいと思っていたが、しかし、まだもう少しできるだろうと組手をやることにした。

そして現在、息子を気絶させてしまった。

（はぁー、気絶させちゃった、明日から少し加減をしよう）
と誓うのであった。

・・・ミーナ・・・

（最近、カイトと全然遊べなくて暇だなぁー）
それも年下なのに知識豊富で私、年上としての威厳ないなぁー。

・・・ユナ・・・

「マイケル、基礎のトレーニングはどうだったかしら？」

「いやーとても優秀だったよ」

「へえーそれはすごいじゃない」

「・・・」

幼年期（2）（後書き）

これから一日一回更新できるようにがんばりたいです。

幼年期(3)

・・・カイト・・・

一年後・・・

今年で五歳になった。現在の日課は、トレーニング、読書、ミーナと遊ぶことであった。なぜあったのかと言うと、先日ミーナの両親が、ミーナのおじいさんにあたる人がなくなり、この過疎化が激しいこの村に見切りをつけたのである。

(はあー たった1人この世界で年の近い友人だったのに・・・)

と言うことは置いて、このように、何らかのきっかけで、次から次へと村から人が離れて行ってしまうという問題により、村長、父、母、自分、他10名で合計13人が総人口という事である。

生まれたとき100人を越えていたことから、今日の時点で村の危機であった。

「カイト何つつたてんだ、早く走れ」

「父さん、ちょっと考え事を・・・」

「そうか、まあ若い内はよく悩むもんだ、けど今日のノルマが終わってからにしろ」

「はい、・・・はい・・・」

「 !!!!!!! 」

・・・マイケル・・・

（息子が悩みごとか、珍しいなあー）

と思うように、カイトが初めて悩んでいる事を心配するくらい親バカだった。

そして・・・

「ユナ、か、カイトが」

「どうかしたの？」

「か、カイトが悩みごとを！」

「はあー、・・・そんなの普通じゃない・・・」

と、妻にも呆れられてしまったのは余談である。

・・・カイト・・・

（よっしゃー！、今日のトレーニングが終わったー）

（しかし大変だなあー、トレーニングの量が1年前の3倍なんて・はあー）

というように、異常なまでにトレーニング量が増えているのだった。

という、どうでもいい考え事を含めいろいろな考え事により徹夜

してしまい死ぬ思いでトレーニングをすることになってしまったのであった。

幼年期(3)(後書き)

はあー、書き終わったー!!

幼年期（４）

１０ヶ月後・・・

「カイト、この村もそのうち廃村になるだろう・・・だからお前がどうしても言うなら学校に通わしてやる」

「父さんどうしたんだ急に！！」

「別に急なことでもない、前々から考えていたんだが、もうこの村もやっていけなくなるから、まだ全然先のことだが、将来の就職について考えないといけないと思ってな」

「お金はどうするんだよ！？」

「まだ子供なんだそんなこと気にするな・・・」

「別に学校に行かなくてもいいよ、父さんみたいに冒険者になりたいから」

「そうか、そうか、おっーーーーやっばりおまえはわたしのむすこだーーーー」

「ちょっと、と、父さん、く、くるじいよー」

「おいっ、どうしたんだカイトよ、か、カイトおおーーーー」というようにカイトは、なさけなくも父に抱きしめられ気絶してしまったのだった。

翌日・・・

「そこっ、そこっ、甘い」

「ちよつと、と、父さん、どうしたんだよ、いつもより何倍も厳しいじゃないか!？」

「当たり前だ、お前は冒険者になるんだろう、なら、過酷な自然を生き抜くためのトレーニングだからだ」

「そっ、そっ、そんなああー」

「つべこべ言わずかかってこい」

「たっ、たっ、助けてええー、母あさーん」
くそっ、違う仕事探せばよかったかなあーと思うのだった。

・・・ユナ・・・

（結局、マイケルや私と同じ冒険者になろうと思うなんて、生きていてくれるかなあー）
と思うのだった。

けど、マイケルは自分と同じ冒険者にカイトをさせたかっただなんて・・・

幼年期（4）（後書き）

はぁー、今日是最悪だぁー！

なんか知らんけど書いた文が急に消えちゃうなんてさぁー

はぁー・・・

少年期（1）

・・・カイト・・・

2年2ヶ月後・・・

あれから2年2ヶ月が過ぎ、8歳になった。これまでの内にはかなり訓練したため、8歳だけど父であるマイケルと組手をやると3本のうち1本とれるようになっていた。（手加減あり）

そして、

「そろそろ実践を経験した方がいい、実践の訓練こそが冒険者の始まりだ。だから、これから仕事についてこい」

といわれ、実際に魔物といわれる生物を討伐しにいくのについていく事になった。

（はあー、村から外へ出るのはそういえば初めてだったなー、父さんが危険だから外へ出るなど言っていたからなあー）

「どうしたんだ、カイト、やっぱり初めて外へ出るから緊張しているのか？」

「うん、ちょっとね、けど今日は結局なにするんだっけー」

「ああ、今日はラット村（今すんでる村）から東に2キロいったところにある村の近くでうろついているゴブリンの討伐だ」

歩くこと30分・・・

「おつ、着いた、それにしても大きい村だなあ」

「そりゃあー、この近辺じゃあ大きい村だからなあー、といつてもたいしたことねーよ、町は小さくてもこの大きさで、活気はすごいからなあー」

「へえー!?!」

（でも、前世はもつと発展していたとこにいたっけなあー、そういやあー忘れてたなあー）

「おいっ、どうしたんだ、ってそんなことより買い物いくぞ」

「・・・・・・・・・・」

道具屋・・・

「おおっ、すげー、店はそんなに大きくなくてもこの取り揃えなんて!?!」

「それは冒険者が、冒険に必要な消耗品を一式揃えるところだからなあー」

「ふーん、ねえこれは!?!」

「んっ、ああ、それかぁ・・・・・・・・?」

「えっ、父さんも知らないの!?!」

「ああ、これはちよつと分からないなあー」

「あつ、それですか、大変お目が高いですなあ、それは、拡散型回復薬ですよ。なかなか作るのが難しくてかなり値が張りますが、近くにいる生物をすべて回復させる魔法が構築されたものなんですよ、といつてもどつかの軍隊位しか買うことがないとおもいますがねえー」

「へえー、そんなに高いんですか？」

「１大判（１億円）もするんですからねえー」

「なつ、なつ、いつ、１大判んーーーーー!？」

「ええ、ですから飾りみたいな物ですよ」

「そうですかあ」

「そういえば今日はなにを買われますか」

「あつ、そうでしたな、回復薬１０個と小さな大袋１つを」

「はい、回復薬１０個と小さな大袋１つですね、合計６銀貨です。ありがとうございます。またお越しくださいますせ」

「ほら」

「えっ!？」

「それはおまえが必要なもんだ、あと武器と防具をかいにいくぞ」

「父さんは回復薬いらなの？」

「大丈夫だ、まだ残ってるからな、それと小さな大袋は腰のあたりに付けておけ」

「はい、はい」

少年期（１）（後書き）

あのー、すみません・・・１人評価をしていただいたんですが返
答できないみたいで・・・。

それはさておき、やっと書き方が分かってきてよかったと思います。
ます。

少年期（2）

・・・カイト・・・

「よし、次は武器屋に行くぞ」

「どこにあるの？」

「酒場の横の前に防具屋と並んである、まあ真ん中のメイン通り沿いだし簡単に分かるが一応覚えとけ」

「・・・はい」

武器屋・・・

「おお、すげえー、武器がたくさん、ってこれ日本刀!？」

「はあー、そこまで高くない武器にしろよ」

「おじさん、この刀いくらするの？」

「ああ、それが、それは高いぞ、なんせ元々の刀の鋭さに加え魔法でさらに鋭くさせ、弱点である剣の脆さを克服させることができたっぴんだぞ、ってわるい、わるい、つい話し込んでしまったな、それで値段だが10大判だ」

「・・・!？」

「どうしたんじゃ、おーい、おーい」

「・・・・・・・・・・!？」

「はぁー・・・・・・・・」

「・・・・・・・・じゅ、10億円んんー」

「10億円というのはよく分かんが10大判なのはたしかだ」

「はぁー」（買えるわけがない、せつかく前世の懐かしい物を見つけたのに）

とシヨクを受けたのだった。

「カイト決まったか？」

（日本刀に似たやつ欲しいなぁー）

「いくらなんだ？」

「・・・・・・・・10大判」

「・・・・・・・・・・10大判だとおおー」

「・・買ってくれないよね」

「当たり前だ、そんな高いの買えるわけないだろー」

「はぁー、やっぱりね」

「高くても1金貨までで選んでくれ」

「はぁーい」

「どれも武器って高い物なんですネ」

「まーな、材料も結構高いし何たって利益だろ、利益がなきゃあやってけないからなァー」

「そうですねえー」

「……（どうしよっかなァー、大剣、太刀、槍、片手剣、双剣、弓、と基本は6種類かァー、大剣と槍は、重いから動かし難いからなァー、太刀はいいけど自分の腕力でうまく使いこなせるかなァー・・・、とすると・・・うーん、双剣にしよう、そこそこ使えるし、・・・うん、これだ）」

「おじさん、双剣にしようと思うんだけどどれがいいと思う」

「まだ小さいんだから双剣はやめといった方がいいぞ」

「訓練で使ったことあるから大丈夫だよ」

「ほおー、そうかならこれなんてどうだ」

「こ、これは？」

「金がそこそこ出せるみたいだからな、鋼の双剣だ」

「えっと、それいくらなの」

「これが、1金貨だよ」

「うーん・・・、分かったよそれにする」

「まいどあり」

武器購入後・・・

「おつ、やっと買い物が終わったか、いくらだった？」

「1金貨ちょうどだった」

「そうか、なかなか高い物を買ったのだな」

あーーーー日本刀がああああーーーー
と心の中はまだ締められなかった。

少年期（2）（後書き）

はあー、ほんとうまく書けなくてすみません。

設定（1）

今までの登場人物紹介

カイト＝アークス・・・主人公。（元、普通の会社員）で転生者。この世界では、ファンタジーにある冒険をするため日々鍛える事にしたのだった。

マイケル＝アークス・・・主人公の父。元冒険者でかなり名がうれていた。

ユナ＝アークス・・・主人公の母。このあたりで好奇心で冒険者をやっていたら、仲間に裏切られ教われそうになった時に助けたのがマイケルだった、以来、冒険者をやめて、助けられたのがきっかけで仲良くなったマイケルと結婚した。

ミーナ＝アズウェル・・・カイトの幼なじみ。（この転生した所の）、ミーナが6歳になる少し前に引越して遠くへ行ってしまった。

通貨について

銅貨	・・・100円
銀貨	・・・1000円
金貨	・・・10000円
小判	・・・100000円
大判	・・・1000000円

村について

ラット村・・・村の大きさは標準位だが人口が少ない村。人口10人から13人まで減。

ドリーム村・・・ラット村から東へ2キロの地点にある村。この地方では面積が広く、人口の多くなかなか栄えている村。

物価

武器・・・1銀貨↗1小判
防具・・・5銀貨↗10小判
食事・・・1銅貨↗3銀貨
宿泊（1泊）・・・5銅貨1金貨
回復薬・・・1銅貨
小さな大袋・・・5銀貨
木の双剣・・・5銅貨
鉄の双剣・・・3銀貨
鋼の双剣・・・1金貨

設定（１）（後書き）

評価をありがとうございました。意見を参考にがんばりたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0249h/>

異世界の冒険

2010年10月8日22時44分発行